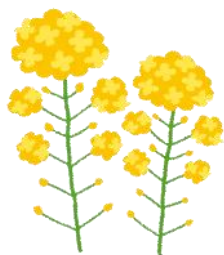


発行日 平成27年5月1日(金)
京極町生涯学習センター湧学館

春です！



京極の町をぶらり文学散歩



散歩するにはもってこいの季節がやってきました。文学散歩など、どうでしょう。こんな小さな町に何があるの？と思う人もいるでしょうが、いやいや、意外な顔ぶれにびっくりすると思います。

(湧学館司書/新谷保人)

現代の地図で「京極町」 文学散歩マップはつukれない

京極町の文学散歩マップや歴史マップを作ろうとすると、とたんに難題にぶつかります。作業が進まなくなるのです。どうしてか。それは、現在の京極町地図には「胆振線」の線路が描かれていないから。あるいは、「脇方」の町が消えてしまっているからなのです。

ご存じの通り、京極は、ワッカタサップ川上流に鉄鉱石の大鉱床が発見されたことによって、他の町には見られない劇的な発展をした町です。脇方の山奥に大資本が入ります。北海道の鉄道網がまだ根室や稚内に到達していない時代に、鉄道が走っていて当たり前という町が出現したのです。

小林多喜二の小説にも、峯崎ひさみさんの小説にも、当然のように「京極駅」が登場します。それを表現するには、なんとしても「胆振線」がバーンと載っている地図がほしい。



京極読書新聞は
毎月1日発行予定です。

祖母「多与」がたどった山麓の道

いい地図が見つかりました。それも、意外なところから。以前、小説「多与」を書いた大沼桂子さんから、祖父母、倉田欣之丞と多与が開拓に入ったルートを子孫がたどった時の地図を湧学館に寄贈されていたのを思い出したのです。地図を取り出して、みて、大感激。脇方の町が、胆振線脇方支線がくっきりと描かれている！

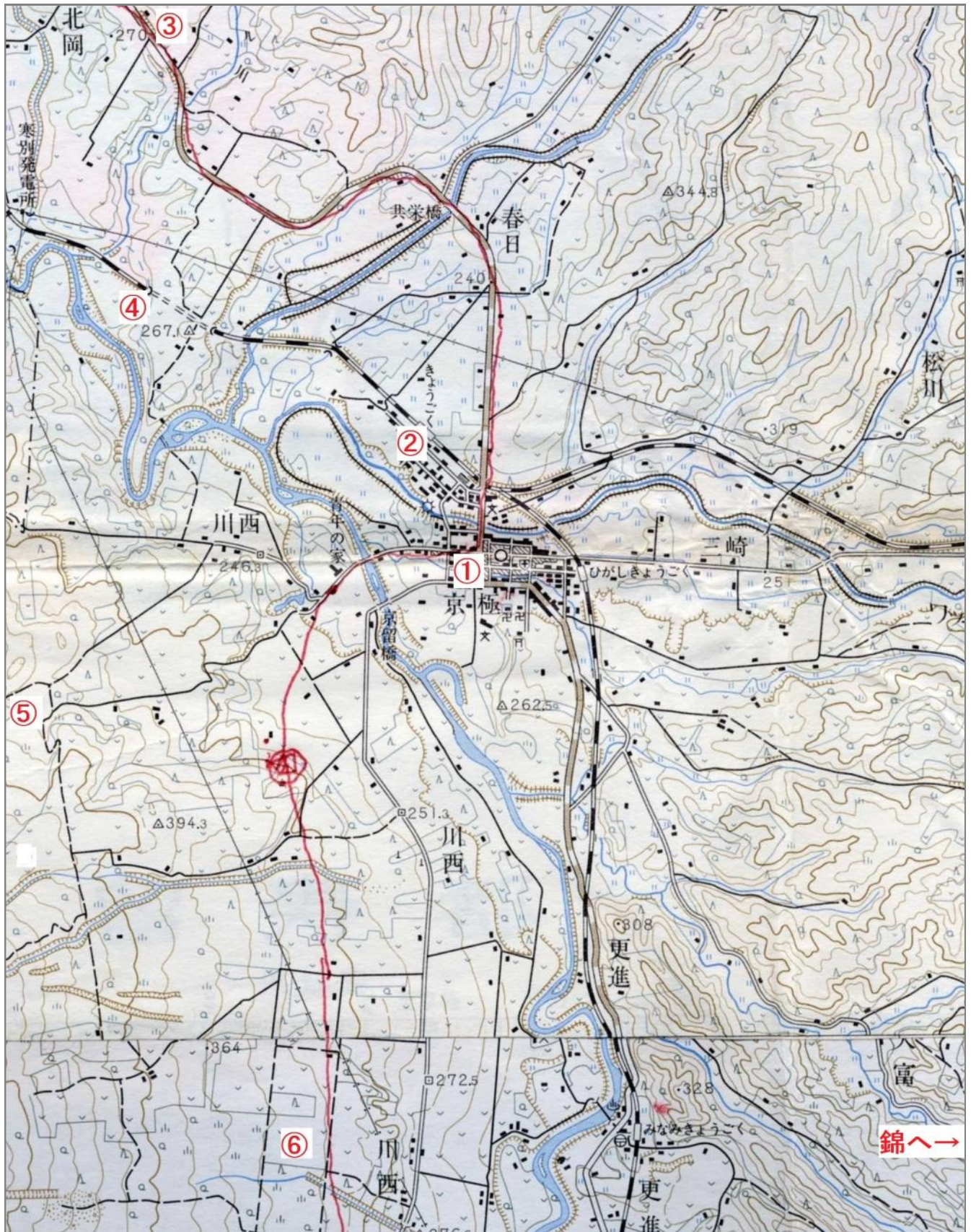


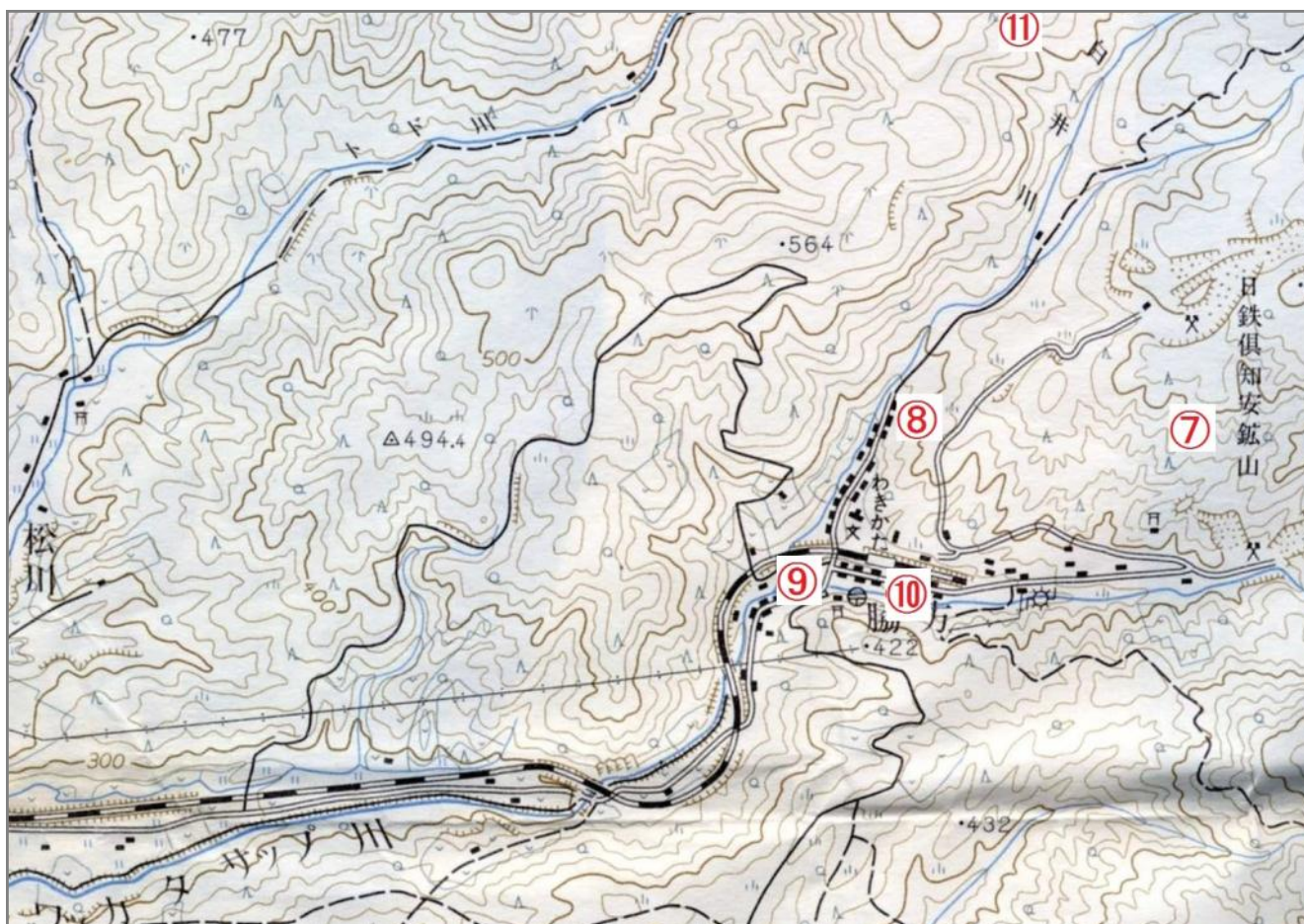
地図は、昭和42年版の五万分の一地図を貼り合わせたもので、「多与」たちがたどった道が赤い線で書き込まれています。2ページの地図にも赤い線が入っていますが、明治42年、倶知安から留寿都村字登延頃（のぼりえんころ）まで行くルートで、東倶知安村を通る時は、現在の京極―豊浦の道道97号線ではなく、もっと山側の道が使われていたことを初めて知りました。何時間でも見ていられる、京極町にとってはかけがえのない資料です。



京極町「文学散歩」マップ

《昭和42年版 五万分の一地図 より》





①光寿寺／小林多喜二「東倶知安行」……昭和3年2月、日本で初めて行われた普通選挙。北海道一区・労農党から立候補した島田正策の応援に小林多喜二たちは東倶知安村に向かいます。光寿寺は演説会場となった場所。そして、「私」のアジテーションがはじまり、「私」の人生がおぼろげな姿を見せはじめた場所でもあった。

②京極駅／本山悦恵「雪灯り」……多くの作家によって「京極駅」は描かれていますが、この「雪灯り」はひととき印象深い。大正8年、開通したばかりの、まだ京極駅が終点だった頃の東倶知安線（京極線）が登場します。

③大森光章「安産」……京極駅に降り立った「わたし」。駅を「材木くさい駅」と表現。

④軽川トンネル／沼田流人「血の呻き」……トンネル開削工事のためのタコ部屋は、東倶知安線ができてしまえば、もうこの世には存在しないものではあるのです。沼田流人の眼前に出現した「タコ部屋」。この、ただ一度きりの光景を「血の呻き」という作品に書きとめただけでも偉業と言えます。

⑤羊蹄山／大森光章「霧鐘」……①から⑪までの作家の中で、実際に羊蹄山山頂まで登ったのは、大森光章と大町桂月の二人だけ。

⑥鈴木農場／鈴木實「近代農業の先駆け 鈴木重慶伝」……大正10年、川西の鈴木農場からトラクターの爆音が響いてくる。

⑦佐々木六郎「わっかたさっぷ」……アイヌ語の「ワッカタサップ（＝水汲みに下る）」が地名「脇方」の由来です。

⑧大森光章「王国」……廃鉱が決まった鉱山街に、ただ一人居残り続ける老人と犬。

⑨大町桂月の漢詩……日鉄鉱業所（脇方）の所長・大町政利は文人・大町桂月の甥。

⑩峯崎ひさみ「種付けの集落」……鉱山宿舎で賄いの仕事をしている鈴代は、年に一度、種付けの手伝いに「北の沢」の家までやってくる。鈴代の人生とは。

⑪吉村昭「与三吉」……熊撃ち猟師の与三吉。熊を追って倶知安の山奥まで入ってしまった。

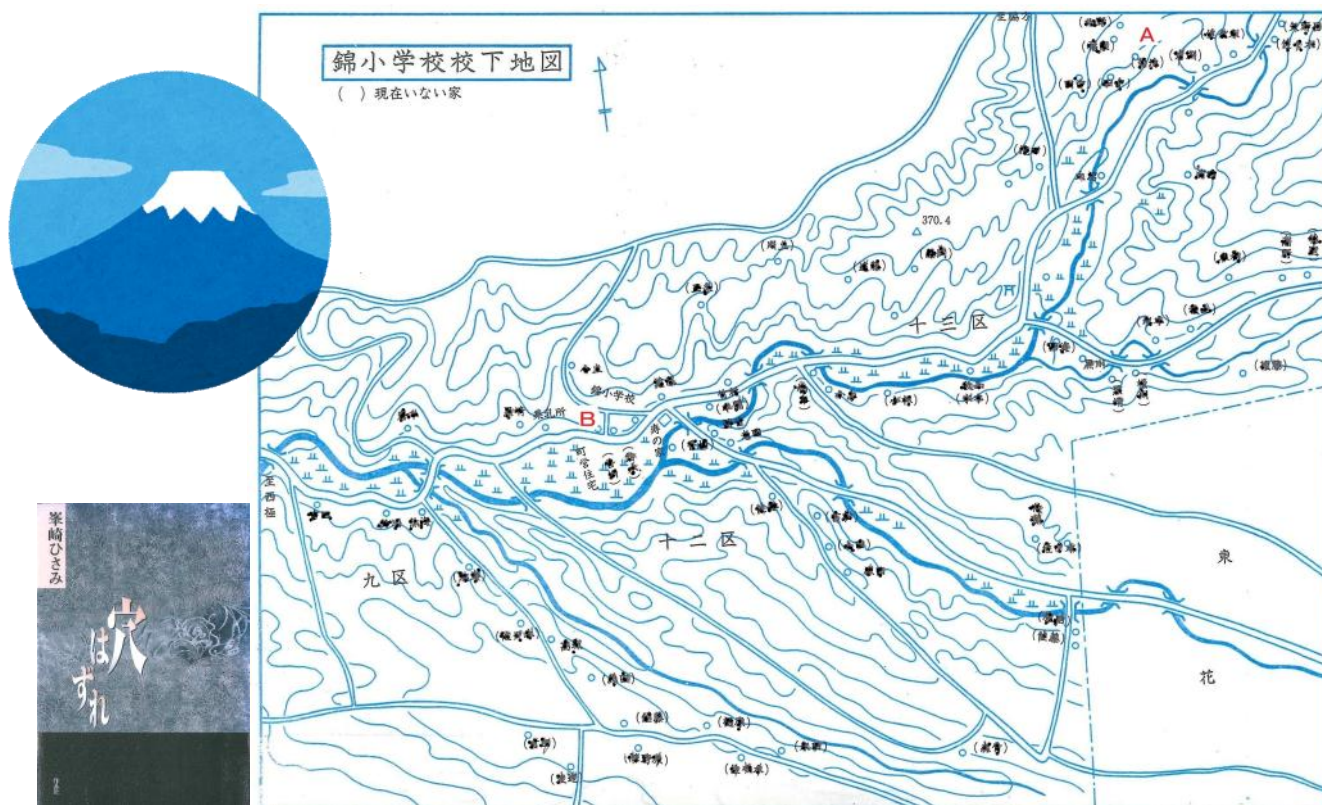
ようこそ！北の沢へ！ 「穴はずれ」の舞台、錦

峯崎ひさみさんの小説「穴はずれ」に描かれた「北の沢」も、現在の京極町地図では表現できません。住宅地図で「京極町字錦」をひらくと、わずか2, 3軒の家が残っているだけ。旧錦小中学校も老朽化のため去年撤去され、たとえば「穴はずれ」に描かれたような、仕留めたヒグマを見に村中の人たちが集まってくるような躍動感は全然感じられないというのが正直なところです。

「北の沢」って、本当にここなの？という人には、この地図を。これは毎年度作られている小学校低学年の郷土調べ用の副読本です。現代

では考えられないことですが、古い副読本をあたってゆくと、なんと、それぞれの小学校の校区の地図が付けられていて、しかも、そこには生徒の家の名前が全部書かれているのです。

この地図に出会って初めて、かつてここに集落があり、人々が生きて、泣いたり笑ったりして暮らしていたんだということを実感しました。地図が「ようこそ、北の沢へ！」と呼びかけてくれているような気がします。ちなみに、地図の上で「A」が峯崎さんの家があったところ。「B」は錦小中学校があった場所です。



▲ 昭和48年発行 京極町教育研究所編集「わたしたちの町きょうごく」より

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

